

梅雨が明けるのを待ちかねていたように、ジージーと蟬の賑やかな声が暑い夏をさらに暑苦しく感じさせる。毎年この時季になると母は役所から送られてくる申請書類に神妙な面持ちで、時には考えながら静かにペンを走らせる。

僕の家族は母と双子の兄の三人で、父親は僕が歩き始める前に家を出て行った。経済的に不安定になり、行き場を失った僕たち家族を救ってくれたのは、国民の税金から支給されたものだった。母は「私達は何不自由なく暮らせる日常を当たり前だと思っ**て**はいけないのよ。目には見えないけれど、人間は支え合いながら生きているのよ。」と、僕が物心ついた時から聞かされていた言葉を、歳を重ねる度に感謝の気持ちや、その言葉の重みが僕の心の中で増していった。

近年、少子高齢化や離婚率の上昇にともない、ひとり親世帯の数も増加傾向にある。母子世帯のうち年間所得額が低く、日々の生活に苦しむひとり親世帯が多い現実を目の当たりにした。ひとり親が対象の国の給付金や手当などの経済的支援には、子育て世帯生活支援特別給付金、児童扶養手当、ひとり親家族等医療費助成制度、母子父子寡婦福祉資金の貸付、ひとり親控除が受けられる。

教育や福祉にゴミの処理など、さまざまな公共サービスの運営費用として徴収されている住民税も、前年の所得が各地方自治体の定める額以下の場合**は**非課税になるのだ。深刻な貧困状態にあるひとり親世帯に、国からの行き届いた支援は大変ありがたい。

僕がそれを実感できたのは、中学校生活三年間を締めくくる最大の行事である修学旅行だった。事前に配布された修学旅行の参加同意書を手にした僕は、一抹の不安が頭をよぎった。双子の兄と二人分の修学旅行費を支払えるのだろうか。学校の門を出て、すっかり散った桜の木を横目に、少しの期待を抱きながら僕は足早に家路についた。夕飯の支度をする母の背中に学校の話をするが、今日はいまいち歯切れが悪い。思い返せば、部活体験をした時に、先輩方のキラキラしたかっこいい姿に憧れて運動部に所属する事を決めていた。だが、ユニフォームや用具代を揃える費用を懸念して、部活に所属しない事を選んだ。

「お母さん、僕は修学旅行へは行かない。」あの日と同じように、母に気持ちを悟られぬよう言った。その時に初めて、コツコツと積み立てをしていた話や、就学支援制度を利用しているなど、国民全体の税金で賄われている事を改めて実感した。

僕には夢があり、社会へ貢献できる仕事に就きたいと思っている。国民の暮らしを支える、国民が安心して豊かな暮らしを送ることができるように、国家公務員の資格を取る事を目標に掲げている。人間は自分一人の力で生きているのではない「報恩感謝」を胸に、成人したら納税の義務を果たしていきたい。